始

同人協會發行

ドストイエフスキイ

罪と罰

同人協會編

1

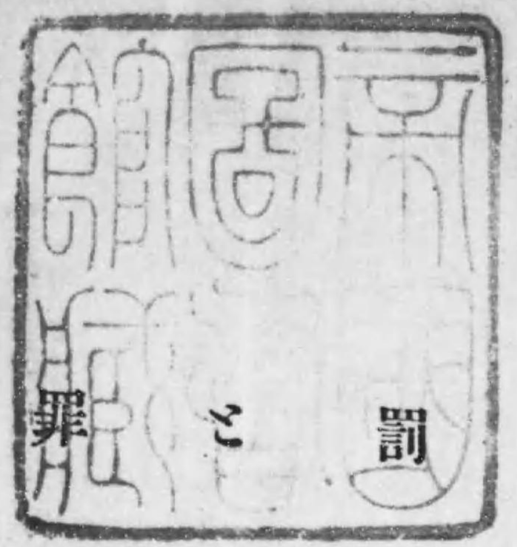
發賣元
大阪パンフレット書店

同人協會の「世界名著選集」

定價三十五錢

292
211

特109
954



同人協會同人編

罪と罰

七月の上旬、或る蒸し暑い日の夕方、C一横町の大きな五階家の貸間を飛出した一人の青年があつた。仕合せなことに階段で下宿の主婦に出會はなかつた。主婦の部屋は階段に面した戸を始終開放して置くので、外出する時には誰でも吃度この前を通らねばならなかつた。青年は大分宿料を滯らせてゐた。それで主婦と顔を合せるのを恐れておどおどしてゐたその上に、近頃蟇ぎの虫に取つかれてゐる彼は、主婦ばかりでなく、人間の顔を見るのが壓で壓で仕方がなかつた。

「何故こんな些細なことにピク付てゐる位で、あの大事件が滝に出來るかしらん」と彼は不氣味な微笑を洩した。

蒸し蒸しした、雜沓した、居酒屋や、小料理店から出る變な臭に滿ちた往來を青年は深い瞑想に耽りながら、時折りぶつぶつ獨語を云つては歩いて居た。

その中に一方は運河に、一方は道路に沿つた大きな建物の前に來た。この建物は小さな貸間に仕切られてゐて、仕立職錠前直し、料理番、出稼ぎ獨逸人、淫賣婦、下級官吏その他勞働者が雜居してゐた。

大學教授の未亡人で、今高利貸をやつて不義の財寶を蓄へてゐる老婆が此處に住んでゐた。青年は誰にも出會はないで

この老婆の部屋のベルを鳴らした。やがて薄暗がりに小さな眼を光らせながら、主人の老婆が無言の儘で青年の前に現はれた。六十位の皺がれた小さな尖り鼻のキラキラした小作りな婆さんで、フランネルの切れを細首に捲き付け、皮の肩掛をして絶えず咳入つてゐた。

「大學生のラスコリニコフです、一と月まへに訪ねて來たことのある……」

「覺えてゐますよ、覺えてゐます」

「また同じ用件で來ました。この時計で幾何貸してもらへますかね」

「こんな古時計幾何にもならない。先日の指環だつて折角だから二枚も出してあげたんだけれど」

といつて、奥へ招じ入れた。

「四枚ばかり貸して下さいな」

「精々一枚半ですね、それも利息を天引にして……」

「え、一枚半！」と覺えず聲を張り上げた。しかし他に行く處もなし、これ以外の用事で來たのでもあることを考へて、青年は思切つて了つた。

老婆はポケットから鍵を摑み出して次の部屋に行つた。やがて箪笥を開ける音がした。一々の聲を逃すまいと青年は聞耳を立てゝゐた。直ぐ老婆は次の部屋から出て來たが、利息とこの前の指環の利息とを天引して一留十五ペックを渡した青年はもぢもぢしてそれを受取りながら「事によると最う一品宜に持つて來るかも知れませんよ」

「その時はまたその時の御相談」

青年は無我夢中で飛出した。戸外に出ると「俺はどうして此んな恐ろしい考をしたんだ」と思つた。老婆に對する憎惡や反感で、ゐたゝまらなくなつた彼はそれを紛らすために直ぐ、地下室の居酒屋に飛込んで行つた。

二

元來ラスコリニコフは交際嫌ひで、まして此頃は友人との往復も一切絶つて不健全な空想に身を任してゐた。けれど酒を一杯夢中で引かけてゐる中に、何だか人が戀しくなつてきた。きたない居酒屋でも世間の人と一緒に居るのが嬉しかつた。亭主は別室に控へ、十四ばかりの兒童が帳場にゐて、その下の小さいのが給

仕をしてゐた。そしてそこには免職官吏然たる男と、小商人らしい三人が腰を下してゐた。

ラスコリニコフはその免職官吏らしい男といつとなく話し始めた。その時その男は「休職九等官マルメラードフで御座います」といつて自分で自分を紹介した

半分滑稽な半分悲劇的な眞面目な態度が、何時の間にか、ひどく自分を卑下したやうな調子に變つて、マルメラードフはかの恐ろしい家庭の物語をラスコリニコフに訴へた。哀れな肺を病んでゐる妻君のイワノヴナの話、餓死しかゝつてゐる子供の事、子供達の食物を得る爲めに一番娘のソーニヤは黄色い鑑札（賣淫婦の鑑札）を特つてゐる事などであつた。

ラスコリニコフは默つてマルメラードフの悲慘な物語を聞いてゐた。マルメラードフは尙話しつゞけた。彼は家には貧に迫つて居る妻子を持ちながら飲酒の惡癖に責められて、近頃やうやうにして得た官職を脫ぎ捨てゝ、娘ソーニヤの抽出から盜み出して、先月分の月給と一緒に飲み盡した事、家を飛出して五日間草船の中に身を隱した事、矩氣な妻イワノヴナが何なに自分を罵倒してゐるだらうといふ事などを聞いた。

ラスコリニコフは親切にもマルメラードフをその家庭に送り届けた。妻のイワノヴナは案の狀非常に怒つて、夫の髮の先を掴んで部屋中を引ずり廻したが、彼はジッと我慢してゐるのみか、自分から

わざと頭を板に打付けた。青年は何も云はずに歸りかけたが、ポケツトから一掴みの金を握り出して、出かけにそつと窓際に置いて來た。

三

ラスコリニコフは其晩夜中寢れないで明方ぐつすり眠つて了つた。九時過ぎに女中のナスターシヤが御茶と砂糖を持つて來て、プンプンしながら起した。彼は小錢を出してパンとスープを取つて來させた。食事を始めるとナスターシヤは、彼が斟定もせず移轉もしないから、警察に訴へると主婦が云つてゐたと話した。それから不在中に屆いた手紙を持つて來た。

手紙は故郷の母からであつた。手に取

ると直ぐ顏色が變つた。早速ナスターシヤを追出して、一人になると唇を當てゝソツと接吻した。開封するのが恐ろしいやうな氣もしたが思切つて封を切つた。手紙にはラスコリニコフの妹ドーニヤが家庭教師をしてゐたスキドウリガイロフ家の主人に言ひ寄られたのを、不義でも仕掛けたやうにマルフア夫人に罵られて追出されたこと、然し後でそれは全く濡衣であつたことが分つて、夫人は自分の罪を詫びた事、最一つはそのマルフア夫人の遠緣の者ルーヂンといふ男から結婚の申込を受けてドーニヤは結婚したことが書いてあつた。「最もその男に關しては、あれは餘り好いてもゐないが、其男は大變な金持だし、見た所正直な品のよ

い人らしく思はれるので」と書き添へてあつた。

ラスコリニコフは此の手紙を見て、結局妹は貧乏な自分達の爲めに身を賣つたのと同じ事と考へた。世の中の普通の女は其身を賣つて、不必要な贅澤品を得て喜ぶと同じ格で、姉は生活の必要に驅られてわが身を賣つたのだ、形式こそ彼と是とは違ふが根を洗へば同じものだとラスコリニコフは考へた。

ラスコリニコフは手紙を讀み終ると蒼白になつた。暫く考へ込んでゐたが、急に帽子を取るが早いか戸外へ飛出した。急用を持つてゐる人の樣に傍目もふらず急ぎながら、絶えずブツブツ獨言を云つてゐるので、往來の人は醉ぎれかと思つ

た。

[1]あちこちとブラブラ歩き廻つた。その中にK一並木路へ來てゐた。十二三間離れた所に腰掛けがあつたので、そこへ腰を卸すと、やつと落付いて來て、「はて今日は一體何しに出て來たらう」と考へた。暫くして彼は、大學同窓中一番仲善の一人、ラズーミヒンを訪ねる積りであつたことを思出した。

「ラズーミヒンを訪ねて仕事の口を頼む積りでゐたのだつけ」と思つたが、ふと自分の希望の全部をラズーミヒンに繫いでたのが馬鹿らしくなつた途端、變な考がムラムラと起つて「よし」と斷乎たる覺悟を決めて「萬事あの一件をやつてからだ、あの一件を果して萬事を一新し

てから、いの一番に訪ねやう、が俺にあの一件がやれるかな、眞實にやれるだらうか」と獨語した。

四

ラスコリニコフが高利貸の婆さん、アリョーナを知つたのは、去年の冬同窓の友人から敎へられたからであつた。その頃暫くは敎師の口があつたので、彼はそれを利用しなかつた。それが一ケ月許り前金に詰つた時、ふとそれを思ひ出して質を置く氣になつた。典物は亡父の遺品の銀時計と妹の記念の金指環とであつた初めてこの指環を入れる積りでアリョーナを訪ねた時から、一目見て虫が好かなかつた。二枚の紙幣を受取ると直ぐその足で或る安料理屋に行つて茶を命じた。

じつと考へ込んでゐると、直ぐ傍の卓子に見知らぬ大學生と青年士官とが對座した。聞くともなしに其話を聞いて居ると金貸婆アリョーナの噂話であつた。

大學生は連りに其噂を續けて、老婆が五千留位の金でも雜作なく融通すると共に、小質をも取ること、貪慾で意志惡で途方もない高利を貸ること、リザヴエータといふ大女の妹……腹違ひか胤違ひかの……を薄馬鹿で力のあるのをいゝ事にして女中代りに殘酷に使つてる事、しかも少しも遺產を妹にやらず、死後は某縣の僧院に永代供養料として寄附するのだと云ふ事實を話した後で、大に激昂した口調になつて「この婆を叩き殺して有金殘らず强奪して呉れやうと思ふ」と語つ

た。ラスコリニコフは自分の腹を見すかされた樣な氣がして覺えず慄然とした。大學生は益々激昂した調子で、一方にはかゝる頑冥不靈なわからず奴があるかと思ふと、一方には糊口の資に事缺ぐ有爲の青年がある。然も老婆の金は有爲の青年の幾百人を救ふ、だから老婆を殺して有爲の青年を救ふべしだ」と盛に氣焔を吐いた。

こんな話を聞いて、時も時符節を合した考が胸中に萌して居た時であつたからラスコリニコフは極度に苦悶した。そして自分は或る大目的と宿命的關係があると考へずにはゐられなかつた。

下宿に歸るとラスコリニコフは一時間許りはジッとしてゐたが、その中にグッ

スリ寢込んで了つた。

突然時計の音が耳に入るとはつと氣が付いた。是程に決心して眞劍に實行する氣でゐながら睡込むとは何だ。今打つたのは六時だらう。先づ第一に兇器を秘す用意を濟ませ、次に典物を細い紐で容易に解けない樣に堅く封じた。老婆が結目を解くすきを覗ふ時の用意だ。丁度その時「六時は既くに打つたぜ」と云ふ聲が下庭の方でした。あわて、戸口に馳け出し、樣子を見た上で、急いで戻つて帽子を取ると四方に氣をくばりながら階段を下りた。

道々も人に疑はれない樣に落付き澄まして歩いたが、心の中では成るべく胸の屈托を紛らす爲めに目前の事物に就て考

へ考へしてゐた。目指す家の前に立つたのは七時半であつた。ラスコリニコフは息が塞りさうになつて、矢張歸つた方が善いか知らんと思つたが、暫く四方を見て人のゐないのを確め、今一度手斧に觸つてから、急いで部屋のベルを引張つたが返事はない。二度目にも返事はない。暫く間を置いて三度目に沈着いて靜かに引張つて見たら漸く返事があつた。

五

戸が少し開いて猜疑深い眼が輝いた。ラスコリニコフは狼狽へて無理に中へ押入つて、尙ほも疑深く見守つてゐる老婆に用意の紙包を出した。老婆は包に手を觸れやうともしなかつた。

「取るのか、取らないのか、取らねば他

へ持つて行くが……」

「お前さんは短氣だね、何だいそれは、銀の葉卷匣、銀らしくもない、何て固い結目だらう」と云ひながら、老婆は包を解き始めた。ラスコリニコフは手斧を右手に秘して持つた。

「こんな品を能く持つて來られたね」と老婆が振向いた。此の機を逸したら取返しが付かないとラスコリニコフは手斧を取出すや否や、眞向に振上げて殆ど機械的に力を入れずに一擊を頭に下した。が一端打下してからは忽ち勇氣を恢復して、二度迄眞向から打下した。腥い血が泉のやうに迸つて死體は其中に倒れた。

ラスコリニコフは見覺えの鍵の環を老婆のポケットから探出して、奥の寢室へ

踏込んだ。簞笥の鍵穴へ鍵を入れようとすると総身がぶるぶる慄へ出した。と突然妙な事が氣になつて老婆が生きてる樣な氣がしたので、あわてゝ死骸の傍に引返したが、頭蓋を滅茶滅茶に碎かれて、腦味噌を出して倒れてゐる。不圖、老婆の首に紐が掛つてゐるので取つて見たら想つた通り皮財布と十字架だつた。

だんだん氣がいらつて來て中々簞笥が開かない。寢臺下を探すと案の狀キツト革のトランクがあつた。鍵を當てると雜作もなく開いて、毛皮の中から時計や腕輪や、鎖や、耳環などが現はれて來た。突然次の間で足音が聞えた。冷水を浴せられたやうにぞつとした。一二分間經つと死んだやうに四方は寂とした。

ラスコリニコフは暫く樣子を覗つてゐたが、手斧を取るより早く飛出した。見ると坐敷の眞中に大女のリザヴエータが無慚な死骸に仰天して聲を立て得ないでゐる。ラスコリニコフは機械的に手斧を眞向から振りかざして、腦天を眞二つに割つて了つた。二度目の殺人は全く思ひがけなかつたので、俄かに恐怖となり逃出さうとした。廊下へ飛出すと、出口の方で二人の喧嘩するやうな聲がして來た四階の方へ登つて來る樣子に、ラスコリニコフは戸の中に隱れて聞耳を立てた。

知らない男はベルを引く、返事がないので叫びながら無性に引く、その中に又一人がやつて來た。やゝコツホ君と云ひながら話し始めた。二人して家番に樣

子を訊きに行つた後ラスコリニコフは隙を覗つて部屋を飛出し、ペンキ屋連の仕事をしてゐた部屋にかくれたりして、誰にも見付けられずに街路へ出た。頭はふらふらして丸で夢の樣な考が入り乱れた

六

ラスコリニコフは寢臺に倒れたまゝうとうとしてゐた。曉け方まで半醒半眠でゐたが、毎朝聞き慣れた街の物音がすると俄破と跳起き、寢臺の端に腰かけてゐると一時に今迄の事が見えて來た。

少し落付いて部屋の中に突立つてゐると、今度は何から何まで氣になつて來た其時に、事によつたら身體中血だらけではないかと思つたが、それと共に財布の事が氣にかゝつて屹度血がついてたに違

ひないとポケットから取出して見た。案の狀血だらけだつた。折から射し込んで來た旭日で左の靴が血だらけなのが分つた。さあ之等の證據物を如何しよう、ストーブで燒く？、マッチが無い、棄てゝ了ふ。そうだ片時も早くと思つたばかりで又しても寢入つて了つた。

突然ナスターシヤが起しに來て、最う十一時ですと叫んだ。その後から家番の聲がして「居ねえんだぜ」と云つてゐる「最う露顯したのではないか」と冷つとした。

「あなたの所へ役所から呼出しが來てゐます」と家番は云つた。

「何處の役所から」青年は胸騷ぎがした

「警察から」

「警察から？、何で」

「何だか知りませんよ」と云ひながら召喚狀を置いて行つた。ラスコリニコフは慄へる手に召喚狀を開いて見ると午前九時半に　頭しろと書いてあつた。

「若し、あの事件で訊問を受けたら……潔く自白して了ふ」と思ひながら警察の方へ曲つて行つた。

いきなり書記に召喚狀を見せて何用か尋ねると、別に妙な顏もしないで書記長の所へ行けといつて奥の部屋を指した。

其處へ立派な風采をした、此區の警部補のイリヤ。ペトローウキチが入つて來て、「何しに來た、お前」と癇癪聲で叱り付けた。

「呼出されたから來ました」と沈着いて

答へた。

「債務督促の件です」と書記長は一枚の紙を披いて見せた。「兎に角あの事件ではなかつた」と思つて吻と安心した。下宿屋の主婦が宿料の滯りを其筋の手をかりて取らうといふのだ。ラスコリニコフは差迫つた焦眉の急を逃れたなと思ふと本能的の喜びを感じた。

ラスコリニコフが帽子を取つて歸らうとしてゐる時、傍の椅子に腰掛けてゐた三人の警部連が、頻りと殺人事件のことで議論してるのを聞いた。

探索、探索、彼奴等は探索し出したなと思ふと、身體中に恐ろしさがしみ渡つて來た。そのまゝ昏倒して氣づいた時は二人の警部に支へられてゐた。

「何うしたんです、病氣ですか」イリヤペトローウキツチが訊いた。

「昨日から」

「昨日外出しましたか？」

「爲ました」

「病氣でゐて」

「え」

ラスコリニコフの蒼ざめて燃えるやうな黑い瞳をイリヤ・ペトローウキチは眺めてゐた。

七

假りに若し家宅搜索の眞最中だつたら……と思ひながら歸つて來た。が何等異狀はなかつた。匿してあつた贓物を此儘にしては置かれない、最速處分しなくてはと、壁紙の中から取出して、財布と一

緒に人目に付かぬ樣に捨てゝ了はうと急いで飛出した。初めは運河にと思つて三十分計り徘徊したが、なかなか好機會を得ないので、ネバ河の方へ行つた。けれど又氣が變つて大通へ出ると、丁度普請中の板圍があつた。四邊を見廻したら人が居ないので、その中へ忍び込み、戸の後の大石を併けて、其下の穴に贓物を埋めて了ひ、石を元の通りにし首尾能く仕事を終つた。

再び街道へ出た時には嬉しくて莞爾とした。之で總ての罪跡が湮滅して了つたもう自分を疑ふ者はないと思つてニタニタしながら町を歩いた。

また種々な問題が頭を往來しだした。それで心を紛ぎらさうと其邊をうろつき

廻つたが、生來の憎惡心が募つて來て、周圍の総てが憎くなつて來た。その中にいつとなくラズーミヒンの家の近傍まで來てゐた。あの一件を果したら眞先に訪ねやうと思つたことを想出して、靜かに五階へ昇つて行つた。

ラズーミヒンは幸ひ在宿して、意外の來客を喜び、其顏色の宜くない理由を心配相に聞いた。

「敎へに行く口はないかね、尤も强て行きたいのではないが……」

「君、何うかしてゐるな突然……」

「いや、何うもしてやせん」と云ひなり無茶に腹が立つて來たので「失敬」と叫んで出かけた。

「歸る、歸るなら宜いが、何しに來た、

丸で人を侮辱する」

「君に救はれたいと思つてやつて來たのだ、然し探す口が絶對にない事が分つたら、自分で何うかするより途がないといふのだ」

路々、ぼかんとして種々な事を考へつゝ歸つたのは八時頃であつたらう。寢台に倒れるとぐつすり寢込んで了つた。

ラスコリニコフは病氣の募る間も、色々な雜念が生じて、或時は自分に喧嘩を買ひに來る人に取卷かれたり、又皆して嘲したり、戸の隙から覗いたり、高笑してる樣に思つた。ナスターシヤも度々來た樣に思つたが。其外によく顏を知つた男がちよくちよくやつて來た。一ケ月も寢てた樣な氣もするし、唯の一日の樣で

もある。また何だか氣が遠くなつて了ひさうであつたが、其中にだんだん正氣付いて來た。

朝の十時頃らしい。上天氣で寢台の方まで日が射し込んでゐた。その傍にナスターシヤと見知らぬ男がゐた。身體を少し起しかけて此の男は誰だと聞いた。

「いや、目が覺めたわね」とナスターシヤが云つた。其處へ長身のラズーミヒンが屈みながら入つて來た。

「如何うした、目が覺めたかい、今日まで四日間昏睡し通しだぜ、余り心配だから醫者ゾシーモフを二度連れて來た。丁寧に診て呉れたが、悪いものを食べたり悪い酒を呑んだりした結果、逆上したのださの事だ、なに直に癒つちまふ」と元

氣よく云ひながら、見知らぬ男に話しかけるとラスコリニコフの母から送金した三十五留を持つて來た使であつたので受取つた。それからナスターシヤを指圖してスープと茶を取寄せて、親切に世話して、ラスコリニコフに飲ました後で、彼を探し出した顚末を語つた。

八

そこへ醫者のゾシーモフがやつて來たゾシーモフは脊の高い肥滿した二十七位の男で、眼鏡をかけ金指環を穿め、流行の粹な夏服を着たハイカラであつた。ラズーミヒンに會釋しながら、病人に近づいて親切に診てやつた。

ラズーミヒンは明日、自分の轉宅祝をするが、その時ラスコリニコフを連れて

行つていいかと醫者に訊ねた。ゾシーモフは、それはまだ早過ぎると答へた。それから御馳走の話や、御客の話が出た。その客の中に警察書記長ザミョートフの名前があつた。

ゾシーモフは、君は何でザミョートフごとき男と交際してるんだと聞くと、自分はあの男と共通の興味を持つてる問題があるからだと答へた。

「へえ、共通の興味？、何です、聞きたいもんですね」とゾシーモフが云つた。

「例のペンキ屋の一件だ、其ペンキ屋が殺人の嫌疑を受けてるのを二人して助けてやらうと盡力してゐるのだ、最う大低落着する」と云つて事件の顚末を話し出した。

「あの老婆殺しの嫌疑なのだが、警察の奴等てんで頭腦がないから、眼前の事實事實と飛んでもない事をやつてゐる。人殺しがあつてから三日目の朝、警察の連中がコツホと今一人の男を、其一擧一動が明白に解つてゐるに猶ほ檢べて居る所へ、殺された共同長屋の眞向ひのビール屋の親爺が「恐れながら」と訴へて來たのだ。一昨夜八時過ぎ、ニコライといふ知り合のペンキ屋が戸外で拾つたと云つて耳環を持ち込んで二留貸せといふ、深く考へもしないで貸すと、ビールを二杯引かけて釣錢を持つて飛んで行つて了つた。ところが其翌朝老婆殺しの一件が耳に入つた。男は前夜の耳環を思ひ出してギクリとした。そこで最速ニコライの處

へ行つて見ると、仲間のミトレイが一人で仕事をしてゐる。仕方がないからそれなりにして置くと、今朝八時頃ニコライの奴がふらりとやつて來た。で耳環のことを聞くと戸外で拾つたといふ、そこでお前は家の騒ぎを知つてゐるかと一本突込むと、いゝや知らんと口を濁して飛出した。で男を追かけたが駄目だつたと云ふのさ、そこで親爺もミトレイも拘留して全力を盡してニコライの在所を捜したところが一昨日になつて首を縊らうとしてゐるニコライを捕へた。そこで段々問詰めたり責めたりして訊問すると彼は白狀した。婆さん殺しの日、彼は八時頃迄ミトレイと一緒に働いて、之から遊びにでも出掛けやうと云ふ時、不意にミトレ

イが突然彼の顏にペンキをなすり付けて逃げた。そこで彼は追掛けて門の直ぐ傍で引捉へて、暫く冗談に取組合をした。その揚句ミトレイが通りの方へ逃げて了つたので、彼はひとり後片付に部屋に歸ると、ふと眼についたのはこの匣で戸の直ぐ傍に落ちてゐたんださうだ」

「戸の傍？、戸の傍て云つたか？」ラスコリニコフは不意に叫んで眼の色を變へた。

「む、然ういつたが何か思ひ當る事でもあるのか」ラズーミヒンも身を起した。

「いや、何もない」

とラスコリニコフは力無い聲で云つたが、また寢返りを打つた。

「半分寢惚けてゐるんだな」

とラズーミヒンはゾシーモフと顔を見合せ乍ら續けた。

「耳環が直きにニコライの手から發見されたのは不利益な点だが、耳環は婆さん所の質物たる事は明白に解つたのだから、コッホが下に行つた間に拔け出した兇行者が、逃げる途中家番やコッホの眼を避ける爲めに、幸ひ開いてゐたペンキ屋の仕事してた部屋に入つたのだ、そしてね、その時に落したに違ひないといふのが僕の解釋だ」

「巧い！が、ちと巧過ぎるよ」

「巧い？」とラズーミヒンが云はうとした時誰も見知らぬ顔が突然入つて來た。

九

それは餘り若くもない癖に、馬鹿に勿

體振つた、尊大な男であつた。彼はまづ戸口に立止つて、臆面もなくあたりを見廻してゐたが、長椅子の上に横になつたまゝ彼の方を見つめてゐるラスコリニコフに眼を注いだ。が少し氣色を和げてゾシーモフの方を向いて切口上で、

「大學生の、いや以前大學生であつたラスコリニコフさんはおいでですか」と尋ねた。するとラズーミヒンが横合ひから引取つて「あすこに、長椅子の上に臥てますよ、何かお用ですか？」

この馴々しい言葉が、紳士の自尊心を傷けたとでも思つたかムツトした。

ラスコリニコフは眞蒼な顔をして、

「そうです、僕がラスコリニコフです、何か御用ですか」

「私はピートル。ペトロウキチ。ルーヂンです。御記憶のことゝ信じます」

ラスコリニコフは全然見當違ひのことを待設けてゐたらしくケロンとして返事さへしなかつた。相手はいよいよ焦れて來た。傍からラズーミヒンが病氣で全三日間も昏睡してゐたのだと話した。

「あなたはまだ國元から何の御便りもお受取りになりませんか……お母さんからお知らせがあつた筈ですが……」

「知てます、知つてます、花婿さんでせう、最うそれで澤山です」

ルーヂンは非常に癪にさはつたらしかつたが、グツトこらへて默つてゐた。暫らくして聲を和げ、母さんと妹御の爲めに宿を決めて待つてることを話した。

ラスコリニコフが「何處？」と聞くと「バカレーエフの家」と答へた。

「知つてる、いや大變な處だよ、汚い所だ」とラズーミヒンが啄を容れた。

ルーヂンはグツト來て、都會慣れぬから何も知らないが、最も清潔な部屋を二室借りてることを辨解した。

そこで程なく切上げて歸らうとしてゐると、ゾシーモフとラズーミヒンとの話を小耳に狹んで、何か利口相な事を話し出したので、ラスコリニコフから散々彌次られ、ほうほうの態で去つた。

するとラスコリニコフは二人に向つて「みんな歸つて呉れ、獨りにしてほしい獨りに！」

ゾシーモフはラズーミヒンと共に部屋

を出た。二人は病人の心にわだかまりがある。ルーヂンがそれかも知れない。も一つ妙な事には病人は何を咄しても一向平氣だが、唯一つあの老婆殺しの一件を話すと昂奮する。警察で卒倒したのもその爲めである事などを話しあつた。

＋

始終付き切りの樣にしてゐたナスターシヤを部屋から追出すと、ラスコリニコフはガバと跳起き、戸に鍵を掛け、ラズーミヒンが置いて行つた袋の中から着物を取出して着替へ初めた。そしてテーブルの上に乘つてゐた金をポケットに捻ぢ込み、不思議にも俄かに沈着いた氣分になつて、ナスターシヤにも見付けられないで戸外に飛出した。

丁度八時頃で日はとつぷり暮れてゐた出て見ると何をするつもりで來たのかわからない。たゞ習慣の隨力で行くともなしに草市場の方へ足が向いた。水晶宮に來た時分には魔性の女があちこちして仲々賑かであつた。來た序だ、新聞でも讀んで行けと店へ入つた。入る時ザミョートフが居る樣な氣がしたが「何にかまうものか」と呟いて茶と數日前からの新聞を命じた。

新聞と茶が來ると例の老婆殺しの一件を探しはじめた。そこへ誰か來た氣配がしたので、見るとザミョートフが例の服裝で立つてゐる。

「昨日ラズーミヒンの話では、まだあなたは昏睡してゐると云つてゐましたが、

これは妙ですな、僕もあなたの處へ行つたんですよ」

「知つてますよ、君が來て靴下を探し出して呉れましたつてね」

「時にあなたは何を讀んでゐる」

「新聞を」

「大分火事がある相ですね」

「いや、僕は火事の事は知りませんよ」

といつて、ラスコリニコフは相手を、豪いな君は、學問がある、指環を穿めてる金持ちだな……」とひやかすので、ザミョートフは度肝を拔かれて、「餘程變だな」と思ふた。ラスコリニコフは「僕の讀むでるのは老婆殺しの一件です」と云つた時、フツと兇行當時の有樣が眼に浮んで來たので堪らなくなり、いらいらし

てハツハツと笑つて誤間化した。

「これは狂人だ」ザミョートフは小聲で云つて去つて了ふとした。ラスコリニコフは何か云はうとして聲が出ないらしく暫らく悶いてゐたが、突然に「我輩が老婆殺しなら何うする」と怒鳴つた。

ザミョートフは顏色を變へたが、直ぐ笑顏になつて「そんなことがあるものか」と自分で自分につぶやいた。

ラスコリニコフは殺氣を含んだ眼で吃とにらんで「さあ云ひ給へ、如何思つてる、さあ何うだ」

「何とも思つてやしませんが」周章てゝ答へたザミョートフは「然うあなたの樣に邪推しては困ります」と云つたものゝ餘程うろたへてゐる容子がありありと見

えた。

十一

ラスコリニコフが表の戸を開けて出やうとする時、下からセカセカとラズーミヒンが上つて來た。肝を潰した顔をして『この命知らず奴、何うしてゐるんだね今迄探してゐたんだが』と散々とつちめて連れて歸らうとした。丁度その時五六十間離れた町外れから喧ましい人聲が聞えたかと思ふと、見る見る黒山のやうに人が集つて大變な騒ぎだ。ラスコリニコフは『何だ』といつて群集の方へ駆けて行つた。

道路の眞中には逞しい丸毛の二頭立の馬車があつた。馭者は馬の首を抑へてゐる。巡査も來てゐた。何か車輪の下に倒

れてゐる。ラスコリニコフは人集りを分けてその騒動の原因を一目見やうとした見ると大地に倒れてる人があつて顔から眼へ血が流れてゐる。馬蹄に蹂付けられた上に滅茶滅茶に顔を蹴られたので隨分ムゴクやられてゐる。馭者は連りに辨解してゐる。巡査は倒れた人の名が分らぬので當惑してゐる。ラスコリニコフはつかつかと出て行つて見ると確かに見覺えがある。

「僕が知つてゐる、非職官吏マルメラードフだ、直ぐ其處のコーゼリの家を借りてるんだ、醫者を早！、費用は僕が出す」

ラスコリニコフは無暗に慌てゝゐた。自分自身の姓名と住所まで告げて、まるで生みの父のことでもあるかのやうに一

生懸命に心配して、怪我人をその家へ運び込ませた。

留守居の妻のカテリーナ。イワーノヴナは十歳になる姉娘を相手に、昔の樂しかつた頃の思ひ出話を聞かせ乍ら、これから病軀を押して、洗濯にかゝらうとしてゐるところであつた。ラスコリニコフは吃驚してゐるカテリーナに事情を話して費用は心配しない樣にと云つた。カテリーナは姉娘ポーレニカに大急ぎでソーニャ姉さんを呼びにやつた。

その中に室内は見物人で一杯になつたカテリーナはその無遠慮を怒鳴りつけてゐた。マルメラードフは人事不省から蘇生して呻き出した。カテリーナは口惜し相に嚴しい顔をして見てゐたが「まあ何

うしませう、此胸を見て下さい、血が血が」と云つてはらはらと涙を流した。妻の顏が解ると怪我人は「牧師さん」をと再三いつた。

折から見物人を押分けて職業柄にふさはしい華美な扮裝をした姉ソーニャと、姉を呼びに行つたポーレニカが歸つて來た。そこへ白髮の牧師がやつて來た。それを見るとマルメラードフは何か云ひたさうな顏をした。そして臨終の暇乞をしやうと立つてゐる娘の顏に氣付くと、

「おゝソーニャか、娘か、許辨してくれ」と我を忘れて伸上らうとしたが、力なく倒れてソーニャに抱へられたなり息を引取つた。「死んだ」と　カテリーナは良人の遺骸を見てワッと泣き出した「何う

しやうか？、何うして葬らう、何うして子供を育てゝ行かう？」

「奥さん心配なさいますな」とラスコリニコフは靜かにその傍に行つて、先週主人と知合ひになつて以來のことを話し、役に立つなら使つて頂き度いと二十留の金を渡して部屋から飛出した。何だか一度宣告された罪人が不意に特赦になつた時の樣な、新しい生活が俄かに展開した樣な氣持になつて、階段を降り切らうとした時、姉ソーニヤの言ひつけでポーレニカが呼び掛けて名と所とを訊いた。ラスコリニコフは餘り可愛らしいので、ポーレニカを接吻して、自分の名と宿所とを告げて歸つた。途中ラスコリニコフはラズーミヒンを訪ねて、マルメラードフ

の一件を率直に話して宿に歸ると、其處には鄕里の母と妹とが彼を待つてゐた。それを見るとラスコリニコフは不意に妙な考へに捉へられて、ぐらぐらとしたかと思ふと其處に倒れた。

十二

ラスコリニコフは正氣に歸ると、半分身を起して寢台に座つた。母と妹の顏を交り交りに二分間も凝視めてゐたが、

「宿へ御引取下さい。この友達と一緒に……それから何時着きました」

母は夕方着いたことを話した。そして母ローヂヤもラズーミヒンも看病の爲めに泊らうと云ひ出した。然しラスコリニコフは「私を苦しめて呉れるな」といつて頑固に追拂つた。

そして妹ドーニヤに

「俺はこの結婚は不承知だ、お前は俺の爲めにルーヂンと結婚しようといふんだらうが、俺は犠牲を欲しないんだ」

かうラスコリニコフは斷乎として言ひきつた。

ドーニヤはムツトして何か云はうとしたが母は周章てゝ制した。そこで三人は宿の方へ出掛けた。

翌日三人はまたラスコリニコフを訪ねて行つた。

十三

「メキメキ捗ります」二人の婦人が部屋に入つて來ると、來合はせてゐたゾーシモフが言葉をかけた。ラスコリニコフも珍らしくシャンと着物を着て、念入り

に顔を洗つて髪を梳いて、ゾシーモフと並んで長椅子に座つてゐた。

「もう、すつかりよくなつたのが自分でも分るよ」とラスコリニコフは母と妹とを懐しさうに抱きしめ、ラズーミヒンにも親しげな言葉をかけた。然しそれは如何にも苦痛を壓へて、豫て考へて置いた文句を思出し思出し云つてゐるらしく、丸で作法の復習でもやつてゐる樣であつた。

最後に例のルーヂンからの今朝の手紙が持ち出された。そして相談の結果三人してルーヂンに逢ふことを約束した。ラズーミヒンにも是非立會つてくれるやうにと母娘から頼んだ。

十四

この時戸がそつと開いて若い娘がおどおど四邊を見廻し乍ら入つて來た。一同は驚いて一齊に視線をその方へ向けた。ラスコリニコフは最初は一寸思ひ出せなかつたがマルメラードフの娘ソーニヤだといふ事が直に分つた。今日は溫和しい堅氣の娘風をしてゐて、昨夜のけばけばした扮裝の跡は少しもなかつた。

ラスコリニコフは「まあお掛け下さいな」と、無理に席に着かせ、改まつた調子でソーニヤを母に紹介すると、母は不機嫌な素振をした。

伏目がちに坐つてゐたソーニヤは、母カテリーナの使ひで、明日のお葬ひに是非共立會つて下さるやうにお願ひに來たと述べた。

「きつと參ります、きつと」とラスコリニコフは吃り乍ら答へた。

母親は憐れむやうな態度でソーニヤを見てゐたが、やがて席を立ち、ラスコリニコフとラズーミヒンに晩の食事に來る樣にと云つた上、ドーニヤと連立ち、二人とナスターシヤに暇乞ひして出て行つた。

ラスコリニコフは暫らく默つてゐたが窓際にラズーミヒンを呼んだ。彼の親類のポルフキーリイが例の老婆殺しの件に關して質入主を調べてるさうだが、實は自分も親父の遺物の銀時計と妹の記念の指環とを入れてあるのだ。それで警察へ行くとするとまた手續書や何やかで面倒だ、直接檢察官に逢つて見たいがといつ

た。ラズーミヒンはそれに賛成して、彼も度々君の噂をして逢ひたがつてゐた。では直ぐ出掛けよう。君があの婆さんを知つてるとはいよいよ面白いなといつたそこでソーニヤと三人で外へ出た。そしてラズーミヒンに連られて檢察官ポルフキーリイに逢つた。

十五

二人が歸る途中警察の人達がラスコリニコフに怪しからん嫌疑をかけてゐることに就てラズーミヒンは頻りに憤慨した自分が若しラスコリニコフの位置に立つたら、彼等の頬つぺたを片つぱしからお見舞申してやると云つた。母と妹の宿つてゐるバカレーエフ旅館の入口にさしかゝつた時、ラスコリニコフは突然「君一

人で行つてくれ、三十分ばかり經つて吃度來るから」と云つて無理にわかれた。

彼が下宿に歸つた時は、すつかり汗ばんで呼吸も迫つてゐた。實はバカレーエフ家の前に立つた時、何か證據品を下宿に殘してある樣な氣がしたので、大忙ぎで歸つて來たのだが、何もなかつたので安心してまた階段を下りかけた。その時家番が「ほら彼處に來た」といふので、「何か」ときいて見ると、家番は「あの男があなたの名をきいて、かういふ書生が下宿してゐるか」と訊ねたと云つた。

ラスコリニコフは直ぐ、この見知らぬ男を追ふて町の角で出あつた。するとその男は、眼を擧げて底意地惡い一瞥をラスコリニコフに與へて「人殺し」と低い聲

ではあるが吐き出すやうに云つた。それをきくとラスコリニコフは身體中がぞつとした。彼はその男をやり過して後影の見えなくなるまで見送つた。

ラスコリニコフは身にしみる程恐ろしくなつて、早速下宿に歸つて漸く寢台の上に横になつた。彼の苦悶は極度に達した。その中に夢心地になつてウトウトして、いろいろな幻覺におそはれた。そして恐ろしさに聲を擧げやうとした途端眼が覺めた。

ほつと息を吐いて、氣がつくと部屋の戸が一杯に開け放されて閾の上に、ついぞ見たことのない男が一人立つてゐた。五十位の田舍じみた男である。

「君は誰です、何の用です」と尋ねると

その男は奇體な調子で「いや、お免なさい、私はスキドウリガイロフです」と云つた。

「スキドウリガイロフ？　馬鹿な！　そんな事があるものか」とラスコリニコフは大聲で叫んだ、然し相手の男は驚きもしない樣子であつた。

「實は二つばかりの理由でお訪ねしたんです。第一には親しくあなたにお目にかゝりたいと思ひまして、第二には妹御さんの事で、あなたの御力添を頂きたいと存じまして」

「それは見當違ひでせう」とラスコリニコフは遮ぎつた。

「しかし、失禮ですが、確か昨日お二人はお着きになつた筈です」とその男が言

葉を切つてから、ラスコリニコフは妹に就いて辨解をした。ぶんぶんして耳をかさうとしなかつた彼は、いよいよ嫌惡の情が募つて來た。

暫らくしてスキドウリガイロフは、

「時に、序にお伺ひしますが、あなたは幽靈をお信じですか」

「どういふ幽靈を」

「なにあたりまへの幽靈です」スキドウリガイロフは變な調子で彼を見た。

「實はあれから、マルフア。ペトロヴナが訪ねて來るのです」

「へえ、あの奥さんが」

「もう三度ばかり來ました」

「一體幽靈はどんな話をしました」

「幽靈がまあかうです」とスキドウリガ

イロフは妻の幽靈の氣味惡い會話から、事實幽靈はあるに相違ないと結論した。

「え、私はあの身内のルーヂンに就て是非お話をしなければならぬのです」と云つて、スキドウリガイロフは話し始めたルーヂンが決してラスコリニコフの妹の好配でないこと、ドーニヤはこの結婚から少しの利益も得られないこと、自分の財產は全部伯母の子供たちのものになつてゐるので手許にはあまりないが、たゞ一萬留ばかりの遊金があるからそれを收めて、この結婚を破談していたゞきたいこと、自分がこんなことを云ふのは別に企みがあつて云ふのではなく、自分のやうな無賴漢でもドーニヤに對する時は或る感じに打たれずにゐられないので眞心

から申出でゝゐるのであること、それにその金は自分にとつて全然不用な金であること、だから是非收めていたゞきたいこと等であつた。

「こりやあ、あなたはどうしても氣違ひですね」と、ラスコリニコフは腹が立つより寧ろ呆れて叫んだ。「もう、いゝ可減でその話を切上げて下さい」

「是非、一度お妹御に御目にかゝりたいと思ひます、…… あ、さうだ！ すんでのことで忘れる所でした、妻の遺言書にあの方に三千留差上げるやうに書いてありました」

「本當ですか」

「本當ですとも、では左樣なら」

客はそこで出て行つたが、戸口でばつ

たりラズーミヒンと出會した。

十六

最う八時近かつた。二人はルーヂンより先へ目的地に行かうと急いで歩いてゐた。

「今のあの男誰だい」

「あれがスキドウリガイロフといふ奴さ、あの男の爲めに妹が非常に辛い思ひをしたのさ」

「なにあの男が君の妹に何が出來るものか、十分二人で保護してやらう」

こんな事を話してゐた時、二人はルーヂンに出會つた。ルーヂンは丁度八時にやつて來たのだ。

部屋に入つてからルーヂンは婦人達の前で特に控目にして見せた。挨拶が終つ

てから、ドーニヤとルーヂンとは食卓の兩側に相對して、ラスコリニコフは妹の傍に母親と向ひ合つて、そしてラズーミヒンはラスコリニコフの横に、一同は座をしめた。

しばらくの間沈默が續いた。ルーヂンはその間氣取つた風をして漸く口を開いて親子にお世辞を並べて機嫌をとつてゐた。ラズーミヒンは始終にがい顔をしてきいてゐた。ルーヂンの話は段々と乘氣になつて來た。遂にあのスキドウリガイロフの古い獸的な行爲の話から、近頃起つたマルファ夫人の死に至るまで大仰に惡く言つて得意がつてゐた。

そんな話はドーニヤには耐へられなかつた。

「あのお願ひでございます、もうスキドウリガイロフさまのお話はよしにして下さいませ」

その時ラスコリニコフは突然、

「あの男は、たつた今まで僕の處へ來てゐたよ、さうだ一時間半程前だつた……ドーニヤには是非會ひたいと云つてゐたし、またマルファ夫人の遺言でお前に三千留やつて呉れとも言つてゐたよ」

「まあ」と母親は半ば驚きなかば喜んで叫んだ。

「それは本當ですか」とルーヂンも口を滑らした。

「それからどうしましたの？」とドーニヤは促した。

ルーヂンはありありと不決な心持を顔

に表はして、時計を出して眺めた。そしていろいろな事を云つて四方にくつてかゝつた。

「到底仲直りをするどころではなくなりましたね」と、彼は椅子から立上つて、侮辱的な笑を彼等親子にあびせかけた。

「すぐ出ていつて下さい」とラスコリニコフが小聲ながらもはつきりと言ひきつた。それで其處にゐられないでルーヂンは部屋を出ていつた。

十七

「いゝえ、私が悪かつたのです、あの方がこれほど程までに卑しい方だとは少しも知りませんでした。私は今後、金などのために目が眩むやうなことのないのを誓ひます」

母を抱いて接吻しながらドーニャはかう言つた。それから五分間ばかり後には笑聲が聞えるやうになつた。ラズーミヒンは今こそ自分の一生をラスコリニコフ一家のためにさし出して盡すべき時が來たと思つた。唯ラスコリニコフだけは矢張以前の場所に腰を下して、ぼんやりした暗い顏をしてゐた。ドーニャは自分に對して兄は尙不愉快な感情を抱いてゐるのではないかと氣づかつた。

「スキドウリガイロフさんは兄さんに何を仰しやいました」

「あの男はお前に無條件で一萬留をやるといつた」

「きつと何か恐ろしい事をたくらんでゐるに違ひない」とドーニャは囁くやう

に言つて身を震はした。

けれど、それから十五分間後には、そんな話もなくなつて、誰も彼も樂しさうに元氣な話をした。その中でもラズーミヒンは感情の昂ぶつた聲に又一層の熱心さを加へて、彼の今までの經驗から出版業に從事する計畫であるとか、彼等親子の親しい友人となつて働きたいとか、彼の抱負を物語つた。ドーニヤの眼は輝いて見えた。

「僕はラズーミヒンの考へは頗る面白いと思ふな」と、ラスコリニコフは言つて「僕とラズーミヒンの兩人協同で五六冊の本を出版するのなら請合つて成功するよ」

「萬歳」と思はずラズーミヒンは叫んだ

その時ラスコリニコフは帽子をとつてスタコラ部屋を出かけやうとした。

「おや、ロージヤ、何處へ行んだ、君今が大事な時ではないか」

「まあ、お前、もうお歸りなの？」母親はびつくりして叫んだ。

「丁度、こんな時刻だつた」とラスコリニコフは憑かれた人のやうに何となく怪訝な調子で獨り言を云つた。

「兄さん、あなたは何處へいらつしやるの」と妹が訊いた。

「もう、何うしても出かけるんだ」

「又、頭の工合が妙になつたんだ」とラズーミヒンはドーニヤに囁いて、固く手を握つた。

「僕はすぐやつて來ますから」彼は死人

のやうに動かずにゐる母親に言葉をかけて部屋の外へ飛び出した。ラスコリニコフはこの友達を廊下の端れで待つてゐた

「僕はきつと君が來るだらうと思つた。僕は多く語りたくない、どうぞ二人の處へ直ぐ歸つてやつてくれ給へ、明日も、それから何時までもゐてやつてくれ給へ」

もうその時は廊下は暗くなつてゐた。暫くの間兩人は默つて顏を見合せてゐたが、ラズーミヒンはこの瞬間を一生涯忘れることが出來なかつた。それほどラスコリニコフの眼差が彼の靈と意識との中に喰ひ込んで來るやうに思はれた。

十八

ラスコリニコフはその足で、河に添ふた古い青く塗つた三階造りのソーニャの家へ行つた。彼は二階まで登つて行つた

が、暗い中に立つて、何處がソーニャの部屋だか分らずに間誤ついてゐると、突然傍の戸が開いた、

「其處にゐらつしやるのはどなたです」とオドオドした女の聲がした。

「僕ですよ、あなたの處へ來たんだ」とラスコリニコフは答へて、さつさつとその部屋に入つて行つた。それに續いて直ぐにソーニャはあかりを持つて入つて來たが、彼女の蒼ざめた顏には紅い色がさして、不意に尋ねて來た彼に對して、明かに驚きの色を現はしてゐた。

「あまりおそく來ましたね、もう十一時でせう」

「え」

「僕はあなたにお別れに來たんだ」

「何處か、あの、いらつしやるんですか」

「さあ、それは自分にも分りません」彼は考へ深い眼をソーニヤに向けた、

「あなたのお父さんが、僕に何日でしたかあなたの事に就ていろいろお話がありました。あなたが、そら六時から出掛けて九時に歸つてゐらつしやる事……さうさう繼母さんはあなたを本當にお打ちになつた事がありますか」

「まあ、とんでもない、どうしてそんな事を仰りやますの」

「ではあなた、あの方を愛してゐらつしやいますか」

「繼母をでございますか、え、左樣でございますとも」とソーニヤは訴へるや

うに言つて、暗い顏付をした。

彼女は泣き乍らいろいろの話をした。彼女が極力繼母の辨護をしてゐる間にラスコリニコフはソーニヤの傍に寄つて來た。彼の眼はキラキラと光つた。彼は兩手で女の肩を押へて、ひたと、その泣顏を見入つた。……突然彼は身をかゞめて床の上に突伏すと、いきなり彼女の足に接吻した。

「どうなさつたのでございます、何をなさいます」彼女は顏の色を變へ、身を引きながら言つた。

彼はすぐに立上つた。

「僕はあなたの前に身をかゞめたのではありません。僕は全人類の苦痛の前に身をかゞめたのです」と彼特有の調子で

いつた、

「まあお聞きゝなさい、僕は先程、ある無禮な奴に向つて、貴樣なぞはあなたの小指一本の値打もないと云つてやりました ……それからまた、僕は今日妹に、あなたと並んで座を占める光榮を與へてやつたといふことを云つてやりました」

「まあ、そんなことを、こんなに汚れた私ですのに……」

「僕は無論あなたの不名譽や罪惡に對してそれを云つたのではありません、あなたの偉大なる苦痛に對して云つたのです……」

ラスコリニコフは、それと同時に、彼女が賣春の恥辱に浸つても、それは唯機械的に觸れるばかりであつて、その賣春

は一滴も彼女の胸に潜み入らないといふことを見た。彼女は彼の前に全く純潔な身體として立つてゐるのである。

「ソーニヤには三つのとるべき路があるばかりなんだ」と彼は考へついた。「運河に飛び込んで了ふか、彼女の現在の狀態では癲狂院へ入院するか、さもなければ理性を聾にし、心を石にする罪惡に全く身體を投げ出して了ふか」であつた。

最後に彼は神にお祈りをなさいますかと尋ねて、彼は古くなつた、手づれた柔皮の聖書を取つた。それは彼があちこちに歩いてゐた度毎に目についた箪笥の上にあつた本であつた。そしてその中にある「ラザロの復活」をソーニヤに讀んで貰つた。彼はそれを聞いてゐる中に感激

して來た。彼は身體中に眞底からの熱を感じて震へた。

聖書を讀み終つた時にはお互の身體は熱しきつて固くなつてゐた。燭台の燈火は消へかゝつて來て、この殺人者と賣春婦との哀れな部屋を悲しげに照してゐた二人は不思議にもこの永遠なる書物を共に集つて讀むだのである。

「僕は今日母とも妹とも分れて來たんです」

「まあ、そんな事を」ソーニヤは驚いて聞いた。

「けれども僕にはまだあなたといふものがあります。僕もあなたも呪はれてゐる人間です。どうぞ僕と一緒に來て下さい。僕とあなたとは結局同じ道を歩かねばならぬ運命にあるのです……若し僕が明日もう一度伺ふなら、あのリザヴエータを殺した下手人を聞かして上げませうではこれで失禮します」

「まあ氣でも違つてゐるやうに」とソーニヤは思つた。彼は去つた。ソーニヤは狂人を見送るやうな心持で彼の後姿を眺めてゐた。

二人の長々しい會話の間中、隣りにあつた空部屋の戸の傍で、立ちぎきしてゐる人があつた。それはスキドウリガイロフであつた。

十九

翌る朝、ラスリコニコフは、かつきり十一時になつて管轄區の警察署の中にあ

る、檢察官の部屋に入つていつて、ポルフキーリイ。ペトローウキチに面會したいと申込んだ。彼は待合室に長い間待つてゐたが「では昨日の、あの怪しい商人の奴まだ告訴に來てないと見えるな……いや、いや、これは俺の病的になつた頭の妄想かも知れない」と思つた。

その中に自分を呼出す者があつた。ポルフキーリイはたつた一人事務室にゐた二人は稻妻のやうな鋭い眼で、相手を探ぐるやうにして見た。

「僕は届書を持つて來たんです……時計のことで……これで如何でせう」

「何です、届ですか、いやこれでよろしうございます」とポルフキーリイは答へた。

「まだ時間もありますから、何卒ごゆつくり」と暫らくしてポルフキーリイは言ひ乍ら部屋の中を歩きはじめた。けれどラスコリニコフは何か馬鹿にされてゐるやうな思ひがして、一層目的に早く近づいた方が、何も彼も片づいてよいと、まづ椅子から立上つて、昂奮し乍ら決心した口を開いた。

「昨日あなたは僕に出頭する樣にと仰せでしたが、何か御用があるのですか、僕も忙がしい身體で、實はこれから或る葬式に行かねばならぬのです。そらあの車で轢き殺された男の、あゝ、確にあなたも御存知の筈でしたね」といつて「若しお尋ねしたいと仰しやるなら、法律上の形式をおとり下さい。それならお答へ

します」といひ添へて帽子を取つた。

ポルフキーリイ。ペトローウキチは燃えるやうな眼付で、じつと彼を見つめながら、又も話しつゞけるのであつた。それは種々な例を引いて來て、ラスコリニコフが老婆殺しの犯人ではないかといふ嫌疑であつた。ラスコリニコフは兩足がブルブルと震へ出した。彼は滿身の力を籠めて、恐ろしいまだ分らない大終極の來るのに備へた。唇は乾き切つて、心臟は激しく鼓動する、顏はまつ蒼になつて眼はぢつとポルフキーリイの上に注がれた儘動かなかつた。彼はポルフキーリイに飛びかゝつて、卽座に絞め殺してしまいたい心持がした。

「あなたのお言葉では、例の老婆殺の下

手人が僕ぢやないかと嫌疑をかけておいでなのがよく分りました、……捕縛なさるなら御遠慮なく捕縛して頂きたい」眼は憤怒に燃え立つてゐた。

ポルフキーリイは親切らしく「又あなたは何時もの發作が一寸起つたんです」となに氣なく云つたが、その實俺はお前の心理狀態をよく知つてゐるぞ、お前はあの犯人に違ひないと云つてゐるやうであつた。

ラスコリニコフの全身は戰慄した。ポルフキーリイは、或晩彼が事件のあつた部屋を訪ねたこと、ベルを鳴らして血の始末をきいたことなど悉皆知つてゐた。そしてその事を話して一層戰慄させた。

この瞬間に隣りの部屋から騷々しい音

が聞えて來た。すると、それはラスコリニコフもボルフキーリイも全然夢にも考へた事のない不思議な出來事が起つて來たのであつた。

二十

戸の後の騒ぎは次第に烈しくなつて來た、戸は少し開きかゝつた。

「何だ、何だ」とボルフキーリイ。ペトローウキチは腹立たしげに叫んだ。

「罪人を伴れて來ました。ニコライを」戸の外で誰かの聲がした。

ぢたばた人の爭ふらしい氣勢がして、忽ちそこへ一人の男が飛び込んで來た。死人のやうに眞つ蒼な顔をした、年の若い職人風の男であつた。

ニコライは急に膝まづいて、

「手前は罪人です、手前は人殺しです」と淀みながらもかなり大きな聲で叫んだ居合せた者は皆驚いて默つて彼を見つめた。

「何を言つてゐる」と始めて醒めたやうにボルフキーリイは叫んだ。

「手前が……人殺しでございます」

「なに人殺しだ……誰を殺した」

「アリヨーナと妹のリザヴエータを手前は……斧でぶち殺したんでございます」

隅の方に立つたなりラスコリニコフは驚いた樣子でニコライを見てゐた。ボルフキーリイは考へ込んで、

「貴樣一人で殺したのか」暫らくして言つた。

「え、一人切でございます」

「なに、この男も又出鱈目をしやべつてゐるな」とポルフキーリイは腹立たしげに呟いた。

ラスコリニコフはポルフキーリイに別れて、眞直に家に歸つた。家に着くと長椅子の上に横になつて、吐息をつきながら考へを纒めやうとした。頭の中は混乱してゐた。もしポルフキーリイが自分の全部を知つてゐるならば、それは確に昨日の男と關係があるに違ひないと考へた彼は暫らく考へてゐたが、カテリーナ・イワノヴナの處へ行かうとして帽子を取つて立上つた。

すると此の時戸が外から開いた。彼は驚いて飛上つた。其處に現はれたのは昨日の男であつた。

「誠にどうも相濟みませんでした」男は平あやまりに謝つて「あなたが日暮方にあの家へいらつしつて血のことを訊いたりなさいました時、手前はその場に居合せたのです、そして、てつきり人殺しの犯人だとあなたを思ひ込みました……今朝は早速、檢察官のポルフキーリイさんを訪ねて、何も彼もお話したのでした。ところがニコライが眞實のことを白狀しました、……どうも誠に、訴へたり悪口したりして相濟みません、どうぞお勘辨下さい」と俄かに丁寧にお辞儀をした。

「なあに構やしませんよ」とラスコリニコフは答へると、商人風の男はまた丁寧に辞儀して、その儘出て行つて了つた。

そこで「ふん、何のことだ」とラスコ

リニコフは思つた。そして勇氣百倍した狀態で出て行つた。

二十一

ドーニヤとドーニヤの母を向ふに廻して、ルーヂンが飛んでもない悲喜劇を演じた翌朝、彼は何時になく引緊つた心持ちで眼をさました。彼は寢床から起きると直ぐ鏡に向つた。近頃少し肥つた品のある白い顏を眺ると、「これならば、あんな女よりずつと優れた花嫁を見付出すに違ひない」と一人で慰めたが、又直ぐ絶望的な心が浮んだ、と、彼の若い友人で、彼を同宿させてゐるレベセートニコフがニヤリと微笑した。それに氣付くと昨夜腹立ちまぎれにこの男に総てのことを打ち開けたのが後悔された。

彼は何の爲めだか數枚の五分利付證券を兩替して歸つて來た。そしてテーブルに向ふと直ぐににがり切つた顏をして、その札束を勘定し出した。レベセートニコフは部屋の中をあちこちと歩きながら彼に話しかけた。レベセートニコフは非常に人のいゝ若者で、酒も飲まず、品行も正しかつた。ルーヂンは彼を心から輕蔑してゐたが、近頃の若い者の思想を知る爲めに彼を利用することを忘れなかつた。

不意にルーヂンはレベセートニコフの言葉を遮りながら、

「今日はあの未亡人から振舞ひがあるつて、僕も招待されてゐるのだ、何で僕なんかを呼んだのかな、昨日一寸通りが

ゝりに未亡人としての扶助金のことを話しただけだのに、……ところで君も行くのかね？」

「私は行きません」

「さうかね、ところで僕の伺ひたいのは君！　君はあの死んだ男の娘を知つてるだらう、君が一つ口を利いてあの娘を呼んで貰へないだらうか、僕はあの娘に一寸會ひたいんだが」

「何の用で」レベセートニコフはびつくりして尋ねた。

「僕は是非會いたいんだ」

「さうか、では呼んであげやう」

さういつてから約五分も經つて、本當にレベセートニコフはソーニヤを連れて歸つて來た。

ルーヂンはレベセートニコフの方をちらりと見て、

「ラスコリニコフは居たかい、あの男來てたかい」と囁くやうに尋ねた。

「ラスコリニコフか、來てゐました」

ルーヂンは一寸眼に物を言はせてレベセートニコフを見やりながら、暫らくしてソーニヤに言つた。

「ソーニヤさん、どうぞ母さんに失禮して了つたことをお詫びしてゐたとお傳へ下さい」

「はい、さう申しませう」

「まだこの外に……實は私昨日通りがゝりにカテリーナ・イワノヴさんにお目にかゝつて立話をしました。どうも眞實にお氣毒ですね、……時に私は出來るだ

けのお世話を致したいと存じますが、先づ差當つて私の力相應な分だけを持つていらしつて下さい、勿論私の名前は仰しやらないで」

かう言つてルーヂンはソーニヤに十留の紙幣を渡した。ソーニヤは紙幣を受取ると顔を紅くしたが、昂奮しきつて、まごつきながらカテリーナの許へ戻つて行つた。後でレベセートニコフはルーヂンをほめそやした。

二十二

カテリーナの許には、もう大勢の人が集つてゐた。下級會社員や、役人の古手や酔つぱらいの退職中尉や、波蘭人や、いづれも貧しげな長屋の人々ががやがやと食卓についてゐた。女家主のアマーリヤ。イワーノヴナは平常はカテリーナと極端に仲が悪かつたのであるが、今日は食器の整理から、料理の支度から一人先に立つて何くれとなく奔走してゐた。

暫らくしてラスコリニコフもやつて來た。ラスコリニコフの來たことは彼女にとつては非常に喜びであつた。

ソーニヤが歸つて來た。彼女は即座に大急ぎで一同に聞えるやうにルーヂンの謝辞を傳へた。

その中に家主のアマーリヤ。イワーノヴナとカテリーナとの間に口爭ひが起り二人の女は立廻りをはじめた。ソーニヤはカテリーナを取り押へやうと馳け寄つた。けれどもアマーリヤが急に黄色い鑑札のことを叫び出すと、カテリーナは娘

を押しのけてアマーリヤに飛びかゝつた
そこへルーヂンが入つて來た。
「ルーヂンさん」とカテリーナは叫んだ
「せめてあなたでも私を保護して下さい」
ルーヂンはつかつかと入つて來てソーニヤの傍へ寄つた。ソーニヤの傍に立つてゐたラスコリニコフは彼を通すべく少し身を引いた。が、ルーヂンはまるで彼には氣付かないやうであつた。
「突然お邪魔に出ましたが…… 實は少々重大事件が突發したからです」とルーヂンは切り出した。ソーニヤさん、私の友人、レベセートニコフの部屋へあなたがお訪ね下すつたすぐ後で、私の机の上にあつた私の所有にかゝる百留紙幣が一枚なくなつたことが發見されたのです」

ソーニヤは死人のやうに眞蒼になつて棒立ちになり、
「でも私何も存じませんわ」
「知らない、御存知ないつて？よく考へて返答して下さいよ……あの私の机から十留の紙幣を取つて、あなたに寸志として差上げた時ですよ……」
ラスコリニコフは壁際に突立つて、腕を十字に組んで火のやうな眼眸をして彼女を見てゐた。
「おゝ、神様」かういふ聲がソーニヤの胸から迸り出た。
ルーヂンは落付いた調子で、門番を警察へ走らせるやうに女家主アマーリヤに頼んだ。
「私もあの子が泥棒だ位は知つてゐま

した！」とアマーリヤは手を打つて喝采した。

カテリーナはまるで狂氣のやうになつてルーヂンの方へ飛びかゝつた。がすぐ娘の方へ飛んで行き、彼女を抱きしめて「ソーニヤ！よくもお前あんな人から十留を貰つたね、馬鹿め！」

かうして娘の手から札を奪ふとカテリーナはそれをまるめてルーヂンの顔へたゝきつけた。ルーヂンは憤然とした。

「この狂女を取押へろ！」と彼は叫んだ

「いいえ、それは私ではありません、私はそんな覺えはありません、私は知りません！」ソーニヤは心臓を抉るやうな叫聲を上げて、母親に身を投げた。カテリーナは娘を庇ふやうに抱きしめて、數限り

なく彼女を接吻した。

「何といふ卑劣漢だ！」とこの時戸口の方にあたつて、大きな聲がひびき渡つた。それはレベセートニコフであつた。

「何といふ卑劣なことだ！」彼はそう繰り返しながらルーヂンの方へつめ寄つたルーヂンはぶるぶると慄へ出した。

「君こそ悪黨じやないか！僕は総てを知つてゐるぞ」

二十三

ルーヂンの計畫はばけの皮をあらはした。そしてそれがソーニヤ一家とラスコリニコフの離間策であつたことは云ふまでもない。

ラスコリニコフはソーニヤの宿へ出掛けた。彼の氣持はだんだん沈んで行つた

彼はソーニャに、昨夜の約束で、誰がリザヴエータを殺したかを説明しなければならなかつた。ソーニャの宿まで來ると急に無氣力と恐怖とを身内に覺えた彼は戸の前に立ち止つたが直ぐ思ひ返して戸を開けた。ラスコリニコフを見ると、ソーニャはあはてゝ立ち上つて、あたかも待ち切つてゐたかのやうに彼を迎へた。

いよいよといふ時が來て— 彼女に打明けるべき時が來て、そのことから來る壓迫が彼の心を一層重苦しくした。

その間に彼の心の中には不思議な感情が湧いてきた。それはソーニャに對して燃えるやうな憎しみの感じであつた。彼は自分ながら此の思ひに驚いて、急に頭を擧げてソーニャをじつと注意深く見つ

めた。この瞬間に彼は老婆の後に立つて斧を環から外した時の恐しい感じと少しも變らぬ思ひが込み上げて來て、全身を戰慄させた。

「どうなすつたの」と稍彼から身を引くやうにしてソーニャは言つた。

「何でもありやしないよ、ソーニャ、驚かなくつたつていゝよ……僕は何だつて此處へ……あなたを苦しめるだけに來たんだらうつて、さう考へてゐるのさ！誰がリザヴエータを殺したかつて……」

「あなた、見つけなさつたの、その男を？」

「いゝや、見つけやしない」

「ではどうしてあなたはお存知なの」

彼はソーニャの方へ身體を向けて、じ

つと鋭く彼女を凝視めた。

「まあ誰だか當てゝごらん……實は僕はその殺した男とは極く懇意な間柄なんだ……」

彼はあの時の事がまざまざと目前に浮び上つて來た。すると、あの日ラスコリニコフが斧を持つて近づいて行つた時のあのリザヴエータの顏、それをそつくり今ソーニャの顏に見たやうな氣がした。ソーニャは彼から少し身を退いた。そして彼の顏に眸を凝らしたまゝのろのろと寢台から立上つた……

「氣がついたね」と遂に彼は呻くやうに言つた。

「あゝ！」と彼女の胸からは怖ろしい悲鳴が迸り出た。

彼女はまるで我を忘れたやうになつて飛上りざま、兩手を握り合はせ乍ら、さらに男の顏をばその場に固く縛られたやうに凝視めた。何をするのか自分でも分らず男の前に膝まずいた。

「いゝえ、廣い世界に、あなたより不幸な人は一人もありません」といふなり急に病的に泣き出した。

彼の胸には長い間忘れられてゐた感情が波打つやうに湧き出して來た。涙が兩眼から溢れ出て睫毛を潤した。

「では僕を見捨てないで呉れますか」

「えゝ、いつまでも」とソーニャは叫んで「私はあなたと何處までも行きます」

ラスコリニコフは苦しかつた。自分がどうしてそんなことをしたのか、はつき

り説明出來ないやうな氣がした。彼は彼がソーニヤ親子を救つた金は正當な金であることを説明して安心させた。

暫らくしてラスコリニコフは

「さあ、僕はこれからどうしたらいゝのだらう、言つて呉れないか」と急に頭を振上げて彼女を見乍らかう訊いた。

「どうしたらいゝ！」と彼女は叫んで、矢庭に立上つた。と今まで涙で一ぱいだつた彼女の双の眼は急にキラキラと輝いた「お立ちなさい！」彼女は彼の肩を掴んで、彼の身を起させた。「直ぐ、今直ぐ行つて、四ッ角に立つて、身を屈めて先づ、あなたが汚した大地に接吻なさいそれから全世界に向つて頭を下げて、四方に聞えるやうに ——私は人を殺しました、と仰しやい。さうすれば神様がまたあなたに命を授けて下さいます」彼女は癲癇にでもかゝつたやうに全身を顫はせながら、彼の両手を掴んで、それを自分の手の中に靠と握りしめ、火の如き眼で彼を凝視めた。

ラスコリニコフは驚いた。彼女の思ひもかけぬ感激に深く打たれた。

「自分に苦しみを受けて、それで自分を救ふんです……苦しむんですわ、苦しむんですわ」と彼女は祈るやうな調子で彼の方へ手を差し延べ乍ら繰返した。

五六分の時が過ぎた。

「あなたは十字架を持つてゐらしつて？無いのですか、さあ、これを持つてゐらつしやい、木造りです、私はリザヴエ

一タと取かへた銅の十字架を架けて居りますから、そして一緒に十字架をかけて一緒に苦しみませう」

丁度その時である。戸を三度叩く者があつた。

「ソーニヤさん、入つてもいゝですか」と聞き覺えのある聲がした。ソーニヤはびつくりして戸の處へ馳けて行つた。其處にはレベセートニコフが立つてゐた。

二十四

レベセートニコフはカテリーナの發狂を告げに來た。ソーニヤはそれを聞くといきなりマントと帽子とを攫んで、それを途々着ながら外へ馳け出して行つた。ラスコリニコフとレベセートニコフも次いで馳け出した。

道で、ラスコリニコフは自分の家の門まで來ると、レベセートニコフと別れて自分の部屋に歸つて來た。そして嘗て一度も感じたことのない程の激しい孤獨な感に打たれた。

そこへ不意に戸が開いて妹のドーニヤが入つて來た。彼女は最初閾際に立つて彼を見てゐたが、やがて中へ通つて彼と向ひ合つて座を占めた。

「怒らないで下さい兄さん」彼女は物思はしげな靜かな調子で前置きした。

「兄さん、私もう何も彼も知つてゐますよ、ラズーミヒンさんが何も彼もわかるやうに話して下さいました。……皆が馬鹿な嫌疑をかけて、兄さんを追ひかけ廻してゐるんですつてね、兄さんが私達から

離れて行かうとなさつた譯がはじめて分りました。前に私が兄さんを責めたことを何うぞ勘忍して下さい……」と言つて、彼女はくるりと身を飜して戸の方へ行きかけた。

「ドーニヤ」とラスコリニコフは彼女を呼止めて、「あの、ラズーミヒンといふ男は非常に善い男なんだよ」

ドーニヤは顏をあかくした。

「それで」と暫く待つて、

「あの男は、事務家で、よく働く正直な強く人を愛することの出來る男だ……ではさやうなら、ドーニヤ」

ドーニヤは眞赤になつたが、急に心配相な顏付きで

「兄さん あなたは何を仰しやいますの

永久の別れでもするかの樣に……」

「どちらにしても同じ事だ……では左樣なら」

彼は身を返して、彼女から離れて窓の方へ行つた。ドーニヤは暫らく立つたまゝ不安氣げな眼付で彼を見てゐたが、やがて心を痛めながら出て行つた。

彼は決して妹に冷淡ではなかつた。彼女を犇と抱きしめて、彼女と告別し、凡てのことを打明けてしまふとさへ思つた位であつた。けれど彼は全然そつけなく振舞つて別れに手を與へることすらしなかつた。

二十五

發狂したカテリーナが走る勢で、石につまづいた時、彼女の胸から澤山の血が

逃り出た。ソーニヤは吃驚して彼女を自分の部屋に運んでくれるやうに一同に向つて懇願した。

それが原因でカテリーナは死んで了つた。ラスコリニコフはカテリーナの葬式が今日だつた事を思ひ出し乍ら、下女のナスターシヤの運んで來た食物を食べてゐると、そこへ戸が開いてラズーミヒンが入つて來た。

妹の話が出た。

暫らくして、ラズーミヒンが出て行かうとして、戸口に立ち止つた。例の老婆殺しの犯人がつかまつたが、驚いたことにはそれがあの自分の辨護してやつたペンキ屋の職人だつたのだと彼は言つた。

「一體それは誰から訊いたんだ」と狼狽

しながらラスコリニコフが訊き返した。

「ポルフキーリイからさ」

「ポルフキーリイから？」

「そうだ、あの男が非常に悉しく僕に說明してくれたんだ、先生獨特の見解でもつて、心理的に說明してくれたんだ」

彼は出て行つた。ラスコリニコフは一人になると、立上つて急に元氣付いたやうに部屋の中を歩き廻つた。

二十六

ラスコリニコフの上に奇體な時が落ちて來た。重苦しい霧のやうなものが彼を陰慘な世界へ閉込めてしまつたやうであつた。時とすると、數分、數時間、或は數日の間、彼は無意識狀態にあることもあつた。そして時々檢察官ポルフキーリ

イとスキドウリガイロフのことが頭を擡あげて來て彼を苦しめた。彼はポルフキーリイに對しても、またスキドウリガイロフに對しても、同樣に一種の逃げ路を作つておかなければならないといふことを深く感じた。そして然る後彼等と戰ふと決心した。

ラスコリニコフは帽子をとつて、彼等二人の中どちらか先へ行つて片をつけなければならないと思つて戸を開けた。丁度その時ポルフキーリイに逢つた。彼はぎよつとして「奴極りをつけに來やがつたな」と思つた。

ポルフキーリイは煙草をふかし終るとニヤリと笑ひながらラスコリニコフを凝視めてゐたが、

「あの女殺し、あれはあなたが殺したんだ、あなたが殺したんだ」と彼は皺れ聲でもはつきりした調子で言つた。

ラスコリニコフはぎよつとした。彼の顏面はピリピリと痙攣的に閃めいた。

「あたし殺しません」と子供がいたづらの現場を見付けられたやうな風に驚いてラスコリニコフは囁いた。

「あなたが殺したんだ、あなたでなくつて誰が殺すものですか」

二十七

ラスコリニコフはポルフキーリイに別れるとスキドウリガイロフの許へ出掛けることにした。彼はその途中で一個の疑問が湧いて來た。彼には實際スキドウリガイロフの行動に就いて明確な判斷を下

すことは出來なかつた。

「もしスキドウリガイロフが妹に忌はしい野心を持つてゐて、そして自分の今度の不幸な事件を利用しようとしてゐるのだつたらとラスコリニコフは考へてみた「さうだ、それこそ俺は奴を殺して了つてやる」餘りに困憊し切つてゐる彼の今の狀態としてはこれ以外に考へやうがなかつた。

果してスキドウリガイロフはラスコリニコフの妹ドーニヤを手籠めにしやうとした。ドーニヤは極力それに抵抗した。

ドーニヤはピストルを發射した。

けれどそれは不發彈であつた。

その夜スキドウリガイロフはソーニヤ

を訪れ、三千留の債券を渡した。そして翌朝、ある兵營の前で、いきなりピストルを自分のコメカミにあてゝ自殺した。

それと同じ日、ラスコリニコフがソーニヤの部屋に入つたのは、既に黄昏であつた。ソーニヤは默つたまゝ箱の中から木製と銅製と二つの十字架をとり出して自分にも十字を切り、彼にも十字を切つてやつて、その胸へ木製の方を掛けてやつた。暫らくして彼はそこを出た。

廣場までやつて來た時、ラスコリニコフは急にソーニヤの言葉を思ひ出した。そして全身をわなわなと震はした。新しい、充實した感情が、一種の發作のやうに彼を襲つて來た。—彼の中のすべては忽ち和げられて涙が迸り出た。彼は地面

ヘハタと打倒れた。彼は廣場の眞中に跪いて，地面まで身をかゞめて、歡喜と幸福とを感じながらその汚ない大地に接吻した。

彼は勇敢に警察の構内へはいつて行つた。そして老婆殺しは自分であることを正直に訴へた。

ラスコリニコフは寛大に取扱はれて、僅か八年の刑期に判決された。ラスコリニコフはかうしてシベリヤに送らるゝことになつた。ソーニヤはスキドウリガイロフに依つて彼女に殘された金を以て彼や彼と共に送らるゝ囚徒の一隊についてシベリヤに行つた。

その二ケ月後ドーニヤはラズーミヒンと結婚した。

ソーニヤの純潔なる心にラスコリニコフの魂は聖められた。蒼ざめた彼の顏には新しい未來、新しい人生の全き復活の曙の光がさし渡つて來た。

（をはり）

罪と罰　（定價金三十五錢）

大正十四年六月二十日印刷
大正十四年六月二十五日發行

著作發行印刷者
同人協會代表
小原一宏
大阪市住吉區天王寺町二一七三

發行所
同人協會
大阪市天王寺町阿部野女學校西一丁
振替大阪五五八一九番

特109
954

世界名著選集 第二

クロポトキン

相互扶助論

定價三十五錢

終